題目　他者に対する親密度と遠慮が作り笑いに与える影響
－ミウチ・セケン・タニンの違いに着目して－

氏名　藤本百香

指導教員　結城雅樹

人は社会で何かの意図や目的を達成するために作り笑いを表出する。押見(2002)では、作り笑い反応のタイプが表出制御、親密性維持、行為統制、感情操作の 4 タイプに同定された。また、親友関係と知人関係における作り笑いを調査した結果、対人親密さが作り笑い反応タイプに与える影響が確認された。土居(2007)で、〈あまえ〉に基づく「遠慮」の有無が、人間関係の尺度を測る読みとして使われていることが提唱された。土居は、「あまえ」の理論から準拠集団としての「セケン」の構造やミウチ・セケン・タニンの存在を定義した。本研究では、ミウチ・セケン・タニンのターゲット区分や動機の違いが、作り笑いに与える影響を検証した。ミウチ・セケン・タニンのターゲット区分は、親密度と遠慮を分類軸とした。本研究では、第一にセケンに対する作り笑いは、ミウチとタニンに対する作り笑いよりも多く表出されるという仮説と、第二に自己印象操作の作り笑いは、タニンで多く、次にセケンが多く、ミウチでは表出が少ないという仮説と、対人関係傷つけ防止の作り笑いと親密性強化の作り笑いは、ミウチとタニンよりも、セケンにおいてより多く表出されるという仮説を検証した。その結果、自己印象操作、対人関係傷つけ防止、親密度強化の３つのタイプの作り笑いが同定された。 本研究では親密度や遠慮が作り笑いに与える影響を検討した。本研究の第一の目的は、ターゲットの区分と動機が作り笑いに影響を与えるかどうかを調べることであった。この点に関して、セケンに対する作り笑いは、ミウチとタニンに対する作り笑いよりも多く表出されるだろうという仮説は、この通りの結果となった。一方で、自己印象操作の作り笑いは、タニンで多く、次にセケンが多く、ミウチでは表出が少ないという仮説と、対人関係傷つけ防止の作り笑いと親密性強化の作り笑いは、ミウチとタニンよりも、セケンにおいてより多く表出されるという仮説は検証されなかった。以上のことから親密度を感じる程度よりも遠慮を感じる程度の方が作り笑いに与える影響がより大きいことがわかった。また、動機によっても遠慮の影響を受ける程度が異なることが明らかになった。これが、ウチやソトといった区分の境界認識が異なる他国と日本との作り笑いの比較をした場合も同じ結果となるかどうかは、今後さらなる研究が必要である。